



下砥川地区にある「砥川阿蘇神社」



西南戦争の戦災を描いた絵馬

光景がほほえましく映ります。

「子どもたちが伸び伸びと、明るく健やかに学べる環境を大切にしています」と思いを話す須崎教頭先生の元に、一人の女子児童が駆け寄って来ました。そして、「教頭先生、パワーをください」と愛らしい笑顔を向けると、須崎教頭先生はその子の視線まで腰を落とし、小さな手を大きな両手で包んで、「よし、パワー注入だ」と応えてあげました。

校庭に咲くシロツメクサの花が風に揺れて、コロコロと笑っているかのようでした。

西南戦争の記憶 伝える絵馬

下砥川地区にある「砥川阿蘇神社」。西暦990〜994年頃に創建されたと伝わる神社で、毎

年10月17日に秋の大祭が行われます。伝統祭りの「砥川宮の獅子舞」の拠点で、コロナ禍で自粛されていた祭りも解禁になり、今年にはぎやかに開催される予定です。

砥川阿蘇神社の本殿には明治10（1877）年に勃発した、西南戦争を描いた絵馬が奉納されています。薩軍の退却路となった益城町では、木山地区内に薩軍が本営を設置したことで、赤井川における戦いを始め、町内で激戦が繰り広げられたようです。

絵馬にはその様子が描かれており、戦災の記憶を継承するため、当時の飯野地区の有識者や有力者たちが描かせたとされています。また飯野地区の地勢や建物などの様子が忠実に記されており、薩軍と官軍の陣配置や攻防の状況が読み取れます。

「西南戦争直後の明治11年に制

作されており、記憶が新しい内に描かれていることから真実性、信ぴょう性の高い資料で大変貴重なものです」と町生涯学習課の堤英介さんが教えてくれました。

心豊かに第2の人生

砥川阿蘇神社の近くに暮らす、坂田俊明さんに出会いました。高台にある自宅のリビングからは、開放的な眺望が見下ろせます。

この場所には、かつて飯野村だった頃に唯一開院した「坂田医院」がありました。俊明さんの父で、27年前に84歳で逝った院長の孝一さんは、亡くなる前日までこの場所を診療を行っていたそうです。

「祖父と父の2代にわたって、地域診療に当たっていました。父は校医でもあり、この自宅横に小学校がありました」と俊明さんは振り返ります。俊明さんは自動車メーカーを勇退後、第2の人生を妻のすま子さんと心豊かに送っています。

一方のすま子さんは日本具象絵画の登竜門である、日洋会（日展系）に所属する画家でもあります。自宅アトリエには、畳2帖ほどの大きいキャンバスに心象画が描かれてありました。熊本地震直後の



上/心豊かに第2の人生を送っている坂田さん夫婦
右/坂田すま子さんが描いた地震直後の心象画

すま子さんの思いを描いたもので、ブルーシートに覆われた町の光景とがれきの上に座り込む少年の表情がとて印象的な作品です。「絵を描くようになってから、視界に映るものの感じ方が変わりました。例えば枯れ葉一枚でも、芽生え、緑を深め、紅葉し、そして朽ちるといった物語があったのだとね」

リビングのソファに仲むつまじく座り、眼下に広がる風景を眺めながらのお茶時間が楽しみだというお2人の、すてきな暮らしに触れました。